

APO Letter

2022
Vol. 82
October

■ 高齢者見守りから、地域づくりにつながる 「みま～も」の取り組み

社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長
介護老人保健施設 大森平和の里 施設長

澤登 久雄 先生





「みま〜も」活動拠点であるアキナイ山王亭に隣接する公園にて
「みま〜もサポーター」がここで野菜を育てたり、地域の子供たちと交流を図っている

社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長
介護老人保健施設 大森平和の里 施設長

澤登 久雄 先生

(写真左から2人目)

2008年に大田区で「おおた高齢者見守りネットワーク(みま〜も)」が発足しました。これは地域の医療関係者のみならず、地域住民、商店、企業などが主体的に参画して高齢者を見守り、支援するネットワークで、その取り組みはメディアでも大きく取り上げられました。

その考えは全国に共感を呼び、現在は全国11か所で「みま〜も」の名を冠した取り組みが行われています。「みま〜も」の発起人であり、現在は牧田総合病院地域ささえあいセンターのセンター長、介護老人保健施設 大森平和の里の施設長を務める澤登 久雄先生に、「みま〜も」発足の経緯や、共感を呼び続けるその仕組みや薬局の関わり方、また今後のビジョンなどについて、お話を伺いました。

Expert Interview

高齢者見守りから、 地域づくりにつながる 「みま〜も」の取り組み

C O N T E N T S

● Expert Interview 1

高齢者見守りから、
地域づくりにつながる
「みま〜も」の取り組み

地域連携・医薬連携に取り組む
薬局事務(RCS)の活動 7

● 専門医療機関連携 地域連携 9
がん治療に関する専門性を地域に還元し、
より高度な医療を届ける
そうごう薬局 久留米医大前店

DXを活用した薬局での取り組み 11

第16回日本薬局学会学術総会開催 13
変革への挑戦～未来の医療を支えるために～



[インタビュー]

濱里 鋼

Tsuyoshi Hamazato
東京南ブロック 兼 静岡ブロック
ブロック長



[インタビュー]

河合 隆

Takashi Kawai
地域ネットワーク事業本部
在宅推進部 リーダー



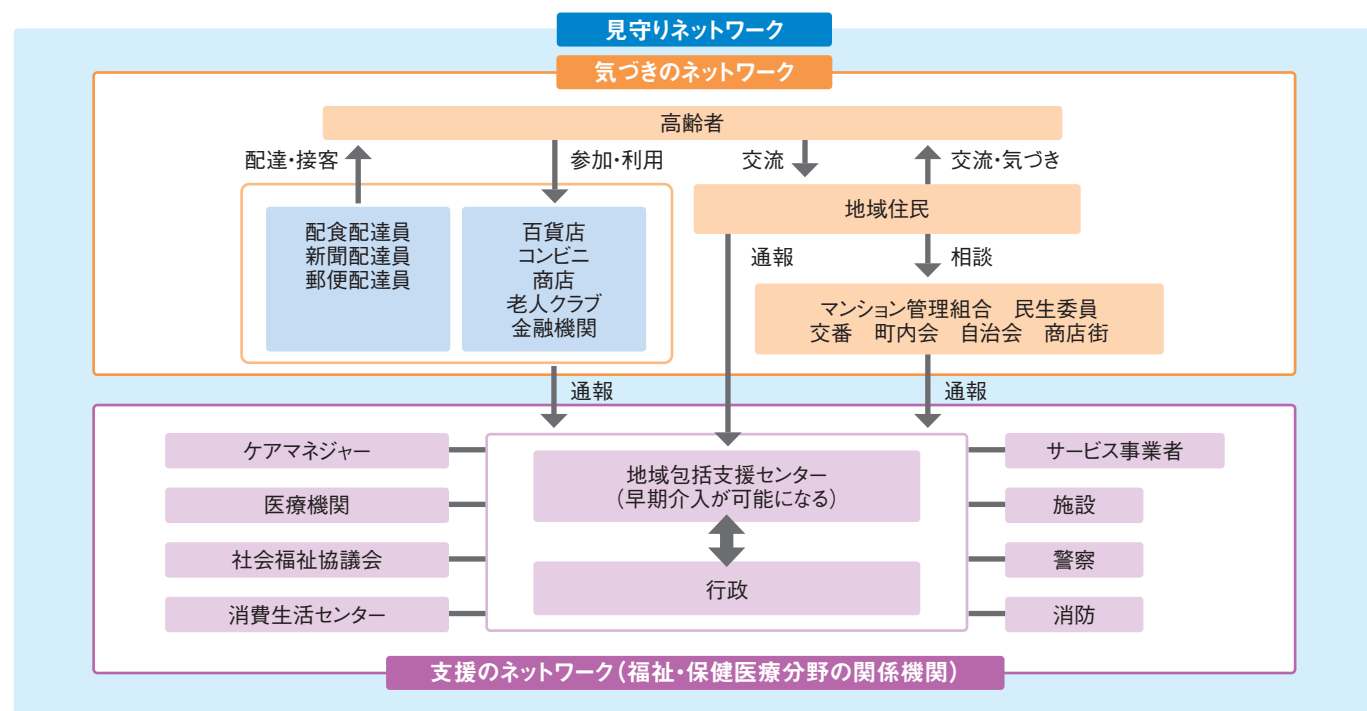
[インタビュー]

杉戸 雄四郎

Yushiro Sugito
そうごう薬局 西蒲田店 薬局長

高齢者見守りから、地域づくりにつながる「みま〜も」の取り組み

図. みま〜もの活動における2つのネットワーク



おおた高齢者見守りネットワーク(みま〜も)の主な活動

●地域づくりセミナーの開催

健康・運動・防災への備えなどをテーマに年9回程度開催

●高齢者見守りキーホルダー

高齢者が外出先で倒れた場合など、迅速に住所・氏名などの確認が行えるようにするための仕組み(実用新案登録済み)

●みま〜もステーション

地域の商店街で行うサロン事業。「元氣かあさんのミマモリ食堂」など、地域住民が気軽に集うことができる場所として活動。

河合 この図を見ると気づきのネットワークには、さまざまな職種や得意分野を持った個人、また商店などにも参加しています。ここに参加している個人や団体には、どのようなモチベーションやメリットがあるのでしょうか。

澤登 もちろん行政や組織のトップが上から押し付けて参加させるのではなく、長続きさせることはできません。現在「みま〜も」への協賛として、大田区だけで約70の民間企業、団体が参加していますが、これらの企業、団体もメリットを感じたからこそ、「みま〜も」に協賛していただいています。現在日本は超高齢社会であり、同時に子供の減少、生産人口の減少も大きな社会問題となっています。企業はどのような状況への対応を迫られていますか、1社だけでは難しいことでも、「みま〜も」に参加することで、異業種、専門職とのネットワークができ、地域のニーズを知り、新たな業態を模索できるのではないかと、実際にコロナ禍となつてから、

さらに問い合わせは増えてきています。トップダウンではなく、地域の主体を核としたボトムアップが求められています。

河合 なるほど、押しつけや義務感ではなく、参加する方もメリットを感じて主体的に参加しているということですね。現在この取り組みは全国にどの程度広がっているのでしょうか。

澤登 「みま〜も」の名称をつけて活動しているところが全国で11か所あります。当初は「みま〜も」を名乗るにあたっては、ここ大田区と同様の活動をしていただくことを求めています。地域によって課題は異なるので、現在は、「みま〜も」の活動の根本である協賛の仕組みで、さまざまな分野の人が協力して街づくりをしている活動に対して、「みま〜も」の名称を使ってもらっています。例を挙げると、鹿児島で活動している「みま〜も・かごしま」があります。鹿児島での地域課題のひとつとしては、空き家問題があるので、ここでは空き家を裏山もセット

2つのネットワークで 地域共生社会の実現に向かう

濱里 本日はお忙しいところ、ありがとうございます。まず、先生が「みま〜も」の取り組みを始めることとなった、きっかけを教えてくださいませんか。

澤登 「みま〜も」の正式名称は「お

おた高齢者見守りネットワーク」で2008年に発足しましたが、その1年半ほど前に「大田北高齢者見守りネットワークを作る会」という準備組織を立ち上げ、地域づくりセ

ナーの開催や「みま〜もレストラン」、「SOSみま〜もキーホルダー」など、現在も「みま〜も」のポイントとなっている活動を始めていました。

当時私は大田区の地域包括センターでセンター長を務めていたのですが、大田区全体で月に約1万件の相談があり、私のいた入新井でも月に500件程度の相談がありました。そうすると、1件訪問するところには違う場所でも何か問題が起こっているという、モグラたたきのような状態が連日続くことになりました。しかも私たちが対応しているのは地域包括センターという行政のシステムに辿り着くことができた人たちだけで、実はシステムの網の目からこぼれている、気づいてもらえないけれども問題を抱えている人たちが沢山いるのではないかと、この思いと個別支援における限界とを常に感じていました。そこで、地域包括センターという点で支えるのではなく、地域の人たち、地域の企業などに協力を求めて面でも支える仕組みを作りたいという思いが、「みま〜も」発足の原点になりました。

濱里 先生が発起人となった「みま〜も」の活動については、「高齢者見守りネットワーク『みま〜も』のキセキ」という本にも詳しく書かれています。拝読して、この活動がほかの地域でも共感を呼び、「みま〜も」

の取り組みが全国に広がっていることを知りました。これほどまでに共感が広がっているのはどうしてでしょうか。

澤登 地域包括ケアシステムなど、全国で様々な組織、団体が地域共生社会の実現に向けて取り組んでいます。その多くが医療職、専門職によるネットワークづくりです。一方、「みま〜も」の特徴としては、医療介護以外のさまざまな得意分野を持った人や商店、民間企業が対等に参画していることです。もちろん医療介護のネットワークは必要ですが、それは支援のネットワークです。地域にはそこに辿り着けない人、声を上げることのできない人が沢山います。そこに気づくためにはもう一つ、気づきのネットワークが必要です。気づきのネットワークとは、商店や町内会、あるいは新聞配達、郵便配達といった、声を上げられない人たちが日常的に関わっている人たちです。気づきのネットワークと支援のネットワークが有機的に循環することで、初めて支援が必要な人を見守り支えあう仕組みが出来上がります(図)。「みま〜も」という取り組みが全国で共感を呼んでいるのも、やはり支援のネットワークだけでは地域共生社会の実現は難しいと感じている人が多いからではないでしょうか。

地域の主体を核とした ボトムアップで共感を広げる

高齢者見守りから、地域づくりにつながる「みま〜も」の取り組み

杉戸 「みま〜も」の活動においては、気づきのネットワークと支援のネットワークという2つのネットワークが必要になるとお伺いしました。薬局はどちらのネットワークにも参加することができると思うのですが、このような取り組みにおける薬局の位置づけはどのようにお考えでしょうか。

澤登 薬局はどちらのネットワークにも参加できる稀有な存在だと思っています。地域包括支援センターは支援が必要となった人たちが訪れる場所ですが、薬局は薬剤師という専門職が存在しながら、健康な状態の人たちも訪問する場所です。そ

こで住民の変化にいち早く気づいていただき、気づきのネットワークと支援のネットワークを繋げていくコーディネートの役割を担ってほしいと思います。

杉戸 具体的には薬局がどのような活動を始めればよいとお考えですか。

澤登 薬局には薬を必要とする人たちだけではなく、健康増進や疾患予防に対する意識の高い人たちも訪れています。そういった方々に対する働きかけを強めて、医療、福祉、介護のフロントラインとして活動していただきたいと考えています。

濱里 総合メディカルグループは健

薬局の役割と今後のビジョン

るはずですので、その繋がりを見つけて出すことが大切です。重要なのは自分たちだけで何かをしようとするのはなく、一緒に連携できる相手を見つけて出すこと。それは専門職に限りません。商店街の中のお店でもいいし、新聞配達の人でもいいと思います。この職種、この人となることができれば、どんな面白いことが起きるだろうかという期待感をもって考えることです。

濱里 そういった視点で考えれば、地域のすべての企業やお店などがつながることができそうですね。

澤登 「みま〜も」を始めて最初にメリットがあったのは、地域包括支援センターの職員です。最初はさまざまな会社が営業に来るのが面倒だったのですが、「みま〜も」を始めてからは、「ことはどんな連携ができるだろう」という興味と期待を持って応対できるようになりました。



康サポート薬局の届け出数が日本で最も多い薬局グループです。ただこれまでのお話をお聞きして、薬局単独での活動が多く、地域での繋がりができていなかったのではないかと感じていました。

澤登 ひとつの組織で完結しないことが今後のキーワードと言えますね。ひとつで何かをするのは点です。ふたつでやると線になり、3者以上で面の活動になります。あとは地域包括センターなど行政も巻き込んだ活動を展開すると、広がりやすくなります。

河合 最後に先生の今後のビジョンについて、お教えください。

澤登 「みま〜も」の活動を15年続けてきて、みま〜もに関連する拠点が地域の中で増えてきていますが、この地域主体の拠点をもっと増やしたいと考えています。地域の中で見守りが必要としているながら手を挙げることでできないのは高齢者に限った

〈プロフィール〉



澤登 久雄 先生
(さわのぼり ひさお)

社会福祉士・介護支援専門員・介護福祉士。2007年社会医療法人財団仁医会が委託・運営する地域包括支援センターセンター長に就任。2008年「おおた高齢者見守りネットワーク（みま〜も）」を発足。その活動は全国で11か所に広がり、協賛事業所・企業・団体は250を超える。2012年に「みま〜も」の活動拠点であるアキナイ山王亭をオープン。現在、牧田総合病院地域ささえあいセンター センター長、介護老人保健施設大森平和の里 施設長。

ことではありません。たとえば取り組みの中で、商店街の中の洋食屋さんが子ども食堂を始めたたりしています。全世代が繋がりがあって、一人一人が主体となって地域を良くしていく活動ができればと思います。

濱里・杉戸 本日はどうもありがとうございます。先生からお聞きしたお話を糧として、薬局としても今後ますます地域を良くしていくための活動に取り組んでまいりたいと思います。

(本インタビューは2022年7月に実施されました)

で借り、山を開墾して、そこを地域における居場所として使用するという取り組みをおこなっています。地域の中に高齢者だけではなく、若い人や子供たちも来ることができ場所を自分たちで作ろうという気持ちで、地域の住民、そこで働く人、専門職が対等に汗をかきながら、居場所づくりに励んでいます。「みま〜も」



の基本的なコンセプトとして、「共感を広げながら主体を作る」ということがありますが、このように、地域で主体を持つ人が広がれば広がるほど、この人たちがまた別のところにも働きかけて新たな取り組みが始まるのだと思います。

濱里 現在「みま〜も」の活動は全国に広がっていますが、やはり最初の一步はご苦労されたのでしょうか。

澤登 難しかったですね。当時近くにあった百貨店の介護用品売り場をお借りして、専門職によるセミナーから始めました。最初は参加者も20人程度だったのですが、コロナの前までには毎月130人程度まで増えてきました。でも集まる人たちはお客さんとして百貨店にきて、セミナーを聞いて帰るだけなので、それでは主体性は生まれないと、物足りなさを感じていました。そこで住民が主体的に参加できる事業を始めたという想いで、「みま〜もステーション」をスタートしました。この活動には「みま〜もサポーター」と呼ばれる、言わば、「応援団」となってくれる住民がいます。「みま〜もサポーター」は講座に参加したり、講座の講師をしたり、ボランティアとして活動したり、各々のライフスタイルや身体状況に合った参加の形で、自身が自由に選択し、時には役割を担い関わってくれています。「みま〜もサポーター」



「みま〜も」活動拠点であるアキナイ山王亭



「みま〜もサポーター」によって整備された公園

の方々には主体的に関わってもらっため、あえて登録料を頂いています。

「みま〜もステーション」の活動の拠点としている、ここアキナイ山王亭は元々、商店街の空き店舗で、裏には公園があるのですが、人通りがなく、地元の人ですら足が遠のいた荒れ放題の公園でした。行政から委託を受けて、その公園を運営することとし、「みま〜もサポーター」の方々と毎日掃除をすることから始めました。「みま〜もステーション」をスタートして半年経った頃には、荒れ放題だった公園は、「みま〜もサポーター」の手によって、柵はベンキが塗り直され、花壇には季節ごとの花が咲くようになりました。

そして、公園の全面改修後は、「みま〜もファーム」と名付けた菜園で野菜を育て、近隣の保育園の園児たちと一緒に、水やりをしたり、収穫をしたりと多世代交流の場にもなっています。

濱里 活動の拠点となる場を自分たちで作り上げていく、それが参加する方々のやりがいにもつながるということですね。「みま〜も」の場合は、最初に場として高齢者の方々が集まる百貨店があったと思うのですが、地域においてそのような場がないときは、どのようにすればいいのでしょうか。

澤登 どの地域でも高齢者は生活している以上、何かしら繋がりがあ

薬局内での健康推進を支援する活動

店舗特性を活かした「健康応援コーナー」の設置と購入者への電話フォローを行なう。



RCS interview

RCSと薬剤師がそれぞれの職能を最大限にいかし、連携して地域・病院と繋がる

●地域との連携

南部九州薬局運営部でRCSによるタスクチームが立ち上がりましたが、最初は何をすればいいのかわからず探りの状態でした。地域包括センターや市役所のホームページを見て情報収集を行い、医療費控除の情報などを患者さんにお伝えすることから始めました。また、行政と薬局でもっと接点を持つことができるのではと考え、飛び込み訪問も始めました。そこで、「薬局としてお役に立てることはないですか？薬のことで困っていることはないですか？」と尋ねたところ、市として予防医療に力を入れており特定検診の受診率を上げたいと考えていることや、地域包括センターが開催しているオレンジカフェ（認知症カフェ）の活動などが分かりました。そこから薬局での健康イベントの開催や、キャラバン・メイト*の養成につながっていました。

今では、地域包括センターから「薬局がここまでやってくれると思わなかった。これからも連携しましょう!」という嬉しいお言葉をいただいています。オレンジカフェで薬局長に講演してもらったところ、参加していた患者さんがそうごう薬局に広域処方箋を持って来られたこともあります。薬剤師は患者対応業務などを行ない、外に出ていく時間は限られているので、RCSと役割分担することで、効果的に地域との連携が図れたと思います。

●病院との連携

まず、「入院が決まったら薬局に相談してください」というポスターを店舗に掲示することから始めました。普段患者さんとお

話しする中で入院の情報などがあった場合には、薬剤師と一緒に聴取し、本人に了承を得たうえで病院に情報提供を行なっています。入院だけでなく、在宅が必要と思われる患者さんについては、こちらから地域包括センターにつなげる取り組みも行なっています。ほかには入院時に情報提供したことによって、病院から次回以降も情報提供のオファーが来るようになったケースもあります。RCSは地元採用で長く勤務している人が多く、患者さんを以前から知っているため、患者さんのちょっとした変化に気づき、入院や在宅の必要性についても的確に薬剤師につなぐことができると思います。

豊見城は生まれ育った場所で、とても愛着があります。これからも地域住民に必要な情報をきちんと伝え、「そうごう薬局がなかったらどうしたらいいの?」と言われるような存在になっていきたいと思っています。



そうごう薬局 豊見城店 リーダー 新里雅美

コロナ禍で外に出る活動が難しい中ですが、私たちの活動に他のRCSが興味を持ってくれていることがとても嬉しいです。今後は外に出るRCSがもっと出てくることを楽しみにしていますし、薬剤師とRCSがさらに連携して、薬局ができることを広げていきたいと思っています。



そうごう薬局 日向店 マネージャー 赤木幸枝

*キャラバン・メイトの登録により「認知症サポーター養成講座」を企画、開催し講師を務めることができる

運営部長のコメント



手探りの中始まった地域連携の取り組みですが、薬剤師・RCS共に皆さんが思いをもってできることを考え行動を続けることで、連携先の増加と関係性の深化から様々な取り組みに発展しております。外来対応が忙しい状況にも関わらず意欲的に活動いただき、パワフルな行動力に心より感謝しています。薬剤師・RCS全スタッフがワンチームとして更に地域医療に貢献できるよう、引き続き推進をお願いします。

南部九州薬局運営部 運営部長 石原 孝

地域連携・医薬連携に取り組む薬局事務(RCS*)の活動

*RCS (Round Care Staff) : 主に薬局事務を担当するスタッフ。事務業務のみにとどまらず、待合室や店舗全体に目を向け、研修を受けたスタッフがケアを行なっている。

総合メディカル南部九州薬局運営部では、薬剤師業務のタスクシフトの一環として、医薬連携や地域連携についてもRCSにできることはないかを検討するタスクチームが発足しました。今回は2020年6月からの取り組みをご紹介します。

1 薬局と地域を繋ぐための活動

自治体、地域包括支援センターを訪問し、保険薬局の機能を伝え、薬局として役に立てることはないか相談。

特定健診の受診勧奨や、健康イベント開催に結びつく

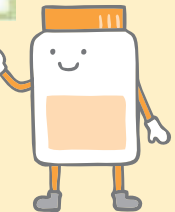


健康イベント開催



自治体訪問時に持参したリーフレット

薬剤師と一緒に、RCSも地域の方の健康支援のお手伝いできないかと考え、キャラバン・メイトや熱中症アドバイザーを取得。



●小中学校からの講座開催依頼

●南部九州薬局運営部でキャラバン・メイト25名誕生



オレンジカフェでの講義



中学校での講義

2 薬局と病院を繋ぐための活動

入院先との情報連携がスムーズに進むよう、入院が決定した患者さんは、薬剤師に申し出てもらうようにポスター掲示、声掛けを行なう。



専門医療機関連携、地域連携の両輪でフィールドをさらに広げる

そうごう薬局 久留米医大前店
薬局長
牧原 直



専門医療機関連携薬局認定取得の経緯

そうごう薬局 久留米医大前店では一日に100枚程度の処方箋を応需しており、そのほとんどが隣接する久留米大学病院からのものとなります。

当薬局は大学病院に隣接しており立地として恵まれた環境にあること、またがんの処方箋も多いことから、早くから専門医療機関連携薬局認定を取得すべきだと考えていました。ただし要件の中にあるがんの専門性の認定を受けた常勤薬剤師がいなかったため、それであれば自ら資格を取得しようと決めました。2021年ころから勉強を始め、2022年4月に外来がん治療専門薬剤師の試験に合格しました。同時に専門医療機関連携薬局の認定も取得しました。約1年で両方達成することができたのは社内の育成プログラムや上長、店舗スタッフの理解と協力、また家族の理解、サポートもあり、とても感謝しています。

がん治療は薬剤師の適切な介入により、アドヒアランスや予後が大きく変わってきます。私がかかりつけ制度が始まる前から担当していて現在は脳転移もありステージⅣ期の患者さんが、さまざまな副作用を発生しているのですが、電話などで状態をうかがい、副作用を軽減できるような対応をしています。

病院との連携について

定期的に薬剤部を訪問しさまざまな疑問に答えていただいております。がん相談支援センターとも連携し、社会的・経済的な支援が必要な患者さんは、センターにつながるようにするとともに、センターの活動は薬局にもチラシを置くなどして周知するようにしています。またガイドラインに基づいたがん治療について、病院の医師に来局いただき、勉強会を開催していますが、そこには近隣薬局の薬剤師の先生方にも参加いただいています。

地域連携について

かかりつけ医と連携し、小児の在宅を月に10件程度対応しています。

健康サポート薬局の認定を取得した際に、地域の訪問看護師や介護事業所を訪問したのですが、その際に特に小児の在宅に関するニーズが高いことが分かりました。心臓疾患や指定難病による医療的ケア児などを中心に手厚く在宅訪問をしています。

地域の薬局との連携については、医師による勉強会に参加いただいているほか、持ち回りで症例検討会も実施しています。また、地域のどの薬局に行ってもがん患者さんをサポートできる体制を作ることを目的に、久留米三井薬剤師会の主催で、**がんサポート研修会が新たに発足しました。活動の一環として地域共通のトレーシングレポートを導入、運用しています。**

今後の展望

今後の展望としては、外来がん治療専門薬剤師の育成を進めるとともに、全員ががん治療について服薬指導ができるよう教育を進めていきます。私自身については、**薬局長としてのマネジメント業務のほかに、一人のプレイヤーとして今後も勉強を続け、フィールドをさらに広げてまいります。**



2022年から導入することとなった地域共通のトレーシングレポート

がん治療に関する専門性を地域に還元し、より高度な医療を届ける

そうごう薬局 久留米医大前店

専門医療
機関連携
地域連携



2022年4月、総合メディカルグループで2店舗目となる専門医療機関連携薬局が誕生しました。そうごう薬局 久留米医大前店では2021年12月に地域連携薬局認定も取得していましたが、今後は主応需元である久留米大学病院と連携しながら、より地域に密着した活動を継続していくことになります。薬局長である牧原直さんに、認定取得に至った経緯やご苦労された点、今後の展望などについて、お話を伺いました。

※専門医療機関連携薬局：病院などと連携して、より高度な薬学管理や、高い専門性が求められる調剤に対応することができる薬局



広くて居心地のいい店内

薬局入り口に掲示された
「専門医療機関連携薬局」
「地域連携薬局」のポスター



そうごう薬局 久留米医大前店
福岡県 久留米市旭町11 副島ビル1階
TEL：0942-36-2261
FAX：0942-46-6732
(開局日) 月～土(祝日を除く)
(開局時間)月～金 9:00～18:00
土 9:00～13:00
※毎月第3土曜日9時から13時に健康相談会を実施

いけだ薬局



いけだ薬局
薬局長
金子 善郎

いけだ薬局では、地域での外来患者さん処方箋応需のほかに、施設在宅調剤を1件、個人在宅調剤を5件担当しています。

Musubiは薬局内、在宅訪問先のどちらでも使用しています。薬局内では処方箋

を受けた時点で事務スタッフが処方入力をして、その間に処方内容や薬歴を確認できるので、業務の効率化につながっています。

在宅業務においても、これまでは薬局に戻ってから薬歴の記載をしていましたが、今は訪問先で入力できるようになったので業務の効率化ができ、その空いた時間を使って患者さんとのコミュニケーションの時間をより長くとることができるようになりました。また訪問先でもその日に処方されていない薬や併用薬、患者さんの体質やアレルギー歴の有無も確認できているので、より安全な治療提供につながっていると思います。

私は当薬局に赴任して4年目ですが、これまで在宅業務の経験は全くありませんでした。在宅業務を通じて多職種の方たちと関わるようになって、薬剤師に対する期

待の大きさを日々肌で感じています。

今後はもっと外に出る活動をして、薬剤師の職能をアピールしていきます。



いけだ薬局
東京都北区滝野川5丁目15-5 1階
TEL : 03-3940-3010
FAX : 03-3940-3366
(開局日) 月～土(祝日を除く)
(開局時間) 月～金 8:30～19:00
土 8:30～13:00

薬局体験アシスタント「Musubi」とは

株式会社カケハシが提供する、次世代型の業務支援サービス。タブレット端末を患者さんと一緒に見ながら服薬指導し、その場の画面タッチで薬歴のドラフトを作成。さらに患者さんの健康状態や生活習慣にあわせたアドバイスを提示し、+αの付加価値を提供することで薬歴業務の効率化と患者さんへの提供価値の向上を実現します。



現場の声

「対話しながら操作が可能なので、患者さんに寄り添ったアドバイスができ、より充実した記録を残すことができるようになりました。」

「患者さんと薬剤師双方で同じ画面を見ながら対話ができるため、患者さんからも、わかりやすいとお言葉をいただいています。」

「病態に応じた健康アドバイス情報を活用することで、会話内容が広がり、患者さんとも自信を持ってお話しすることができました。」

「薬の情報はもちろん、健康アドバイス情報も豊富で、順次新たに追加されるので、自身の学習にも役立っています。」

「患者さんとの対話により時間をかけることができるようになりました。」

DXを活用した 薬局での取り組み

2015年、厚生労働省より「患者のための薬局ビジョン」が打ち出され、薬局における対物業務から対人業務へのシフトが提唱されました。そうごう薬局グループでは、対物業務の効率化と対人業務へのシフトチェンジを加速していくことを目的として、グループ全店舗で薬局体験アシスタント「Musubi」の導入を決定、すでに475店舗で活用されています(2022年9月13日時点)。

実際に薬局内、在宅業務で「Musubi」を活用されている2つの薬局にお話を伺いました。



そうごう薬局 大谷口北店



そうごう薬局 大谷口北店
薬局長
荒木 瑞生

そうごう薬局 大谷口北店では、近隣のクリニックと日大病院からの広域処方箋などを中心に応需しています。Musubiは薬局内だけでなく、施設での在宅業務のため訪問先でも利用します。

以前に導入していた電子薬歴との大きな違いとして、タッチパネルで入力できることと患者さんへの健康アドバイス機能が加わっていることが挙げられます。特に健康アドバイスについては服薬指導の際の参考にしており、薬剤師にとっても勉強になる内容です。また処方後に対応が必要な患者さんについてもカレンダーで確認できるので、後日電話フォローが必要な場合でも、適切なタイミングでフォローができるようになりました。在宅については往診同行の際に使用していますが、これまでは薬局に戻ってから併用薬や副作用などを確認して疑義照会を行っていたところ、Musubiでその場で確認できるのは大きなメリットだと思っています。

今後期待することとしては、一包化調剤や粉砕に適しているかどうかなど、薬剤の特性情報があれば、より便

利になると思います。また在宅では関わるスタッフも多いので、多職種間でこういった端末で情報共有ができれば、より患者さんにとってメリットのある治療が可能となると思います。

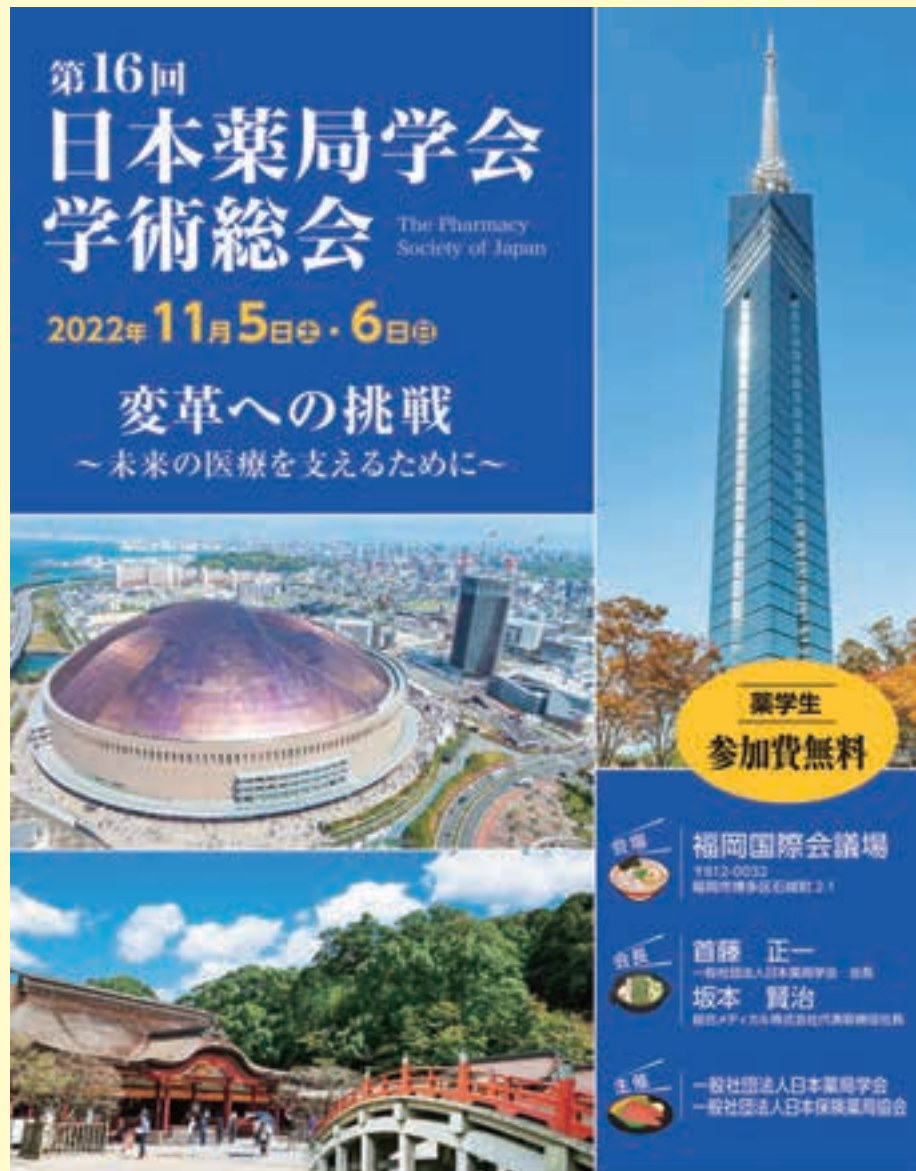


そうごう薬局 大谷口北店
東京都板橋区大谷口北町70-7
TEL : 03-3959-7298
FAX : 03-3959-7385
(開局日) 月～土(祝日を除く)
(開局時間) 月～金 9:00～18:00
土 9:00～12:00

第16回日本薬局学会学術総会開催

変革への挑戦〜未来の医療を支えるために〜

第16回日本薬局学会学術総会が11月5、6日にハイブリッド方式にて開催されます(福岡国際会議場／ライブ配信・一部オンデマンド)。今年には総合メディカル株式会社 坂本社長が大会長を務め、また社員も実行委員として企画・運営に携わっています。学術総会の概要と、総合メディカルグループの発表内容についてご紹介します。



基本プログラム

基調講演 11月5日(土) 10:30～11:15
薬事行政の最近の動向
八神 敦雄 氏
(厚生労働省 医薬・生活衛生局長)

特別講演 11月6日(日) 10:50～11:50
COVID-19 最近の話題
忽那 賢志 先生
(大阪大学医学部附属病院 感染制御部 教授 兼 大阪大学大学院 医学系研究科 感染制御医学講座(感染制御学)教授)

教育講演 1 11月5日(土) 11:15～12:00
with/postコロナ時代の医療のあり方を考える
神野 正博 氏
(社会医療法人財団 董仙会 恵寿総合病院 理事長)

教育講演 2 11月5日(土) 13:30～14:30
オンライン資格確認、電子処方箋等について
伊藤 建 氏
(厚生労働省 大臣官房企画官(医薬・生活衛生局併任))

認知症サポーター養成講座 シンポジウム 10 テーマ 共催セミナー 12 演題

大会長、坂本社長からのメッセージ

令和2年からの新型コロナウイルス感染拡大においても、地域包括ケアシステムの一員として、地域の医療、介護を支え、地域住民の健康を支えるという薬局、薬剤師の役割はますます大きくなっています。安心、安全な医薬品供給・医療の提供に努め、患者個々に質の高い薬学的管理を実践するために地域の医療機関・介護施設・行政などと、これまで以上に連携を深めていく必要があります。

また、オンライン服薬指導や電子処方箋の発行など、医療提供体制の変革に対して、全ての医療者が知恵を出し合い対応することが求められます。

そこで、第16回大会テーマは「変革への挑戦～未来の医療を支えるために～」と致しました。薬局に関わる全ての人々がこの変革に立ち向かい、一人ひとりの工夫・努力が未来の医療を支えるという想いを込めました。

このテーマに基づき、著名な先生方をお招きしての基調講演、特別講演、教育講演のほか、シンポジウム、共催セミナーでは、トップランナーの先生方の講演を行います。また、一般演題発表の数は200を超え、ポスター会場では日頃の研究成果、業務工夫の取り組みを発表致します。そのうち優秀演題として選出された12演題は6日に口頭発表を行います。新しい未来を担う薬剤師の活躍に是非ご注目ください。



当社企画のシンポジウム・発表者を紹介します

シンポジウム(全10テーマ) 【当社企画】2テーマ

シンポジウム名	日時	テーマ
シンポジウム2	11月5日(土) 15:10～16:40	専門医療機関連携薬局の未来図
共催 シンポジウム 1	11月6日(日) 14:50～16:20	医薬品情報提供の個別最適化(日本医薬品情報学会共催)

シンポジスト講演

シンポジウム名	発表日時	所属	氏名	概要
シンポジウム1	11月5日(土) 13:30～15:00	そうごう薬局 西冠店	福井 章人	「保険薬局でもできる研究・学会発表」 「レニンアンジオテンシン系阻害薬、利尿剤、NSAIDsの3剤併用 (Triple Whammy) に関する研究を通して得た経験について」
シンポジウム6	11月6日(日) 13:10～14:40	みよの台薬局(株) 在宅事業本部	高木 和江	「ワンランクアップの在宅医療～ツールを用いた共通認識～」 「在宅業務における情報共有ツール」
共催 シンポジウム1	11月6日(日) 14:50～16:20	そうごう薬局 亀崎店	重松 博美	「医薬品情報提供の個別最適化」 「ドライアイ治療における点眼順序の影響の検討について」

優秀演題セッション(口頭発表)(全12演題) 【当社発表】

演題番号	発表日時	所属	氏名	演題名
AW-06	11月6日(日) 9:30～10:30	そうごう薬局 新倉敷店	湊 菜月子	ピロリ菌除菌療法後の呼気検査偽陰性を防ぐための 電話フォローアップ

一般演題発表(全209演題) 【当社発表 24演題】

総会URL：<https://secure.ps-japan.org/forum2022/>

運営準備室・お問い合わせ先：〒701-0205 岡山市南区妹尾2346-1
TEL:086-259-5578 FAX:086-250-7682 E-mail:2022psj@kwcs.jp



vol.82

2022年10月発行 発行／総合メディカル株式会社
〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神 2-14-8
薬局事業本部 TEL：092-713-7061

